SSKU

1998年10月9日第三種郵便物認可　（毎月3回8の日発行）
2013年1月21日発行　ＳＳＫＵ　増刊通巻第4395号

潮騒ジョブトレーニングセンター　Drug&Alcohol　Addiction　Rehabilitation　Center

潮騒通信「どっこい生きてます！」

SJTC
SHIOSAI JOB TRAINING CENTER
２０１３（平成２５）年
１月号　一部100円

更に原点への思いを強くして～２０１３年への決意

読者の皆さま、遅まきながら新年おめでとうございます。私は今年、薬物やアルコールに頼らない新しい人生に踏み出して10年の節目を迎えます。ダルクやマックの先輩方からすれば、まだまだ短いクリーンタイムにすぎませんが、とても感慨深いものがあります。一人の依存症者として回復途上にある私が、地元の支援者や多くの仲間たちの手助けで施設運営を任されるまでに成長できていることの意味合いを、深く胸に刻みたいと思います。

10年前まで私は、酒と覚せい剤に蝕まれて破滅の人生を突き進んでいました。刑務所の往復生活に疲れ果て、生きる屍（しかばね）状態でした。そんな私が社会に戻ることは、周囲には迷惑極まりないことでした。トラブルを恐れて言葉にはだしませんでしたが、身内は「早く死んでくれ。それが私たちに平和をもたらすことだ」という思いだったはずです。人間としての感情を失っていた私は自分の非を棚に上げて、ままならない人生の不満をぶつけては身内を逆恨みしていました。当時は依存症など全く理解が及ばなかった私ですが、今は去っていた家族や親族にひたすら感謝しています。

長寿社会とはいえ古希を迎えるわけですから、私もそう長くは生きられません。この後も社会の局所で微力ながら依存症に苦しむ仲間の回復を手助けしていくとして、今後は人生の棚卸を通じて身内への埋め合わせをしていきたいと考えています。「依存症であることの自己認知、すなわち自分の無力を認めることは回復のスタートではあっても、否定すべき過去を正当化するものではない。ましてや過去を帳消しにする免罪符でもない。施設を発展させることと並行して、自分を生かしてくれている周囲への、そして過去に迷惑を掛け続けた身内への謝罪と感謝を忘れてはならない」――2013年の年頭に当たり、これを自分への戒めとして回復の原点に据えたいのです。

私は特定の教義に基づく信仰を持ちませんし、自分に都合のいいように人生を語る運命論者でもありません。そんな私でも、この１０年の歩みは私たち依存症者が共通して体感する「自分が信じる神（ハイヤーパワー）」の存在を謙虚に受けとめさせてくれました。世評の厳しい視線と孤立無援だった地域の中にあって、ギブアップせずに地道な活動を続けられたことは、私にとって何ものにも替え難い体験となりました。失敗続きだった過去のマイナス人生が無駄ではなく、逆にプラスとして生かされている現在の姿は、不思議を通り越して正に奇跡です。私に奇跡を導いてくれた絶対的な存在（自然神？）を前に、私は永遠に子供のように純粋な心であり続けたいと願います。どうか皆さま、今年も宜しくお願い致します。　**（施設長　栗原　豊）**

Contents

P1　原点への思い強くして
P2　鹿島神宮への初詣で
P3　フォト餅つき＆新年会
P4　デイケアでクリスマス会
P5　歳末餅つき大会を開く
P6　保育園クリスマス応援
P7　近藤氏インタビュー8
P8　全国受刑者からの便り
P9　続・受刑者からの便り
P10 入寮者しおさい俳壇1
P11 しおさい俳壇2特選句
P12 行事予定＆献金献品

クリスマス会で見事なギター演奏するタケシさん＝関連4ページ

2013年を「潮騒ビレッジ」建設のスタート年に

＝鹿島神宮で初詣で＆デイケア施設で新年会開く＝

新年を迎えた１月４日、潮騒ＪＴＣの入寮者たちが鹿嶋市宮中の鹿島神宮で恒例の初詣でを済ませました。境内で記念撮影の後、順番に並んで本殿に参拝。かしわ手を打ち、礼をして「今年こそ…」の決意を新たに回復に向けた思いを祈願しました。おみくじを引いた仲間たちの中には、大吉の文字を見つけては「神様はまだ俺を見捨てていない。今年はいい年になりそうだ」と喜ぶ光景が見受けられました。

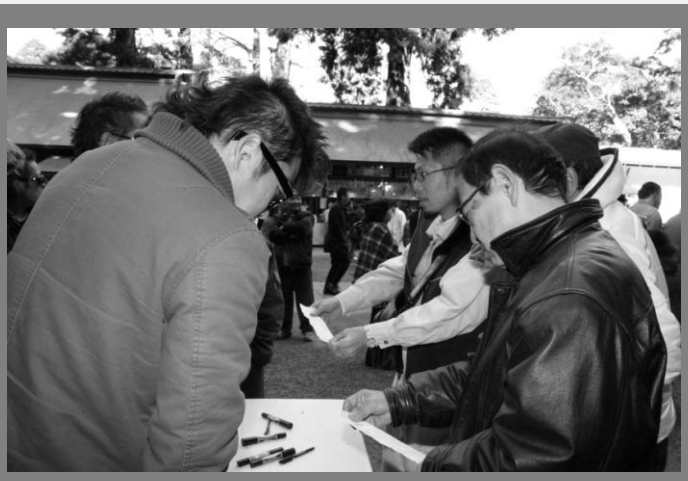
この日の午後には鹿島神宮に近いデイケア施設内で「新年賀詞交換会」が開かれ、栗原豊施設長から年頭の話がありました。栗原施設長はスリップ（薬物、アルコールの再使用・再飲酒）について触れ、自分の病気（依存症）への自覚の足りなさ、甘さに対する自己改善を入寮者たちに求め、改めて「依存症の回復」という“原点に戻る”ことを訴えました。

潮騒では就労支援を通して「社会に出ること」の動機付けを図っていますが、病気が深くスリップを繰り返す仲間たちに対しては社会の目は非常に厳しく、刑務所に送るなど“社会からの排除”の方向にしか進まないのが現実です。とりわけ犯罪につながる薬物を使い続ければ“身の破滅”しか、その結末はありません。

栗原施設長はそうした現実を踏まえ、日常の回復活動の大切さを説きながら今後についても展望し、「今年を“アディクションビレッジしおさい”建設のスタート年にしたい」と依存症村構想に期待を込めました。

引き続き、支援者から今年度のファイザープロジェクト（継続助成）に関する説明があり、2 年目も農業プロジェクトをさらに進め、青パパイヤやジャガイモ、サツマイモなどの栽培や農業に関する講座の開講、履歴書の書き方などを指導する就職講座などの計画を説明しました。その後はカラオケ大会が行われ、それぞれが好きな持ち歌を熱唱しました。中には意味深長？　に「酒」を題材にした演歌を歌う入寮者もいて、潮騒らしい新年会となりました。　（勝）

フォト～鹿島神宮初詣で＆新年賀詞交換会



恒例の鹿島神宮初詣で、「今年こそよい年でありますように」と祈願。

入寮者の新年賀詞交換会は、今回初めて鹿嶋市宮中の潮騒デイケア施設で開かれ、栗原施設長が年頭の決意や抱負を述べた後、みんなで会食やカラオケを楽しみました。

新たな拠点、デイケア施設でクリスマス会

歳末の恒例イベント、潮騒クリスマス会。毎年、入寮者に人気ですが、今回はひと足早く 10 月から活動を始めている潮騒デイケア施設（鹿嶋市宮中）で昨年 12 月 23 日に開かれ、工夫を凝らした企画内容で盛り上がりました。これまで潮騒のクリスマス会は、鹿嶋市まちづくり市民センターが会場でしたが、試行的ながら医療付きデイケア活動をスタートさせており、新たに自前の活動拠点で取り組めるようになりました。入寮者の皆さんは 3 階大フロアのイベント会場で、この日の昼食に特別に用意された握り寿司、鳥もも肉の照り焼き、ケーキ、お菓子などでクリスマス気分を味わいました。その後はバンド演奏を皮切りにカラオケや手品、腕相撲、心待ちにしていたクリスマスプレゼント…など多彩なプログラムが続き、入寮者全員で楽しい時間を共有しました。

1998年10月9日第三種郵便物認可　（毎月3回8の日発行）　2013年1月21日発行　ＳＳＫＵ　増刊通巻第4395号

たこ焼きが初登場・歳末餅つき大会

鹿嶋市更生保護女性会から差し入れも

年の瀬の12月27日、鹿嶋市宮津台の潮騒ＪＴＣ本部施設で恒例の餅つき大会が開催されました。今回は餅つきに加え、たこ焼きも作るとあって入寮者が役割分担してもち米を蒸したり、たこ焼き屋さんからたこ焼き用の生地の作り方を教わったりして、下準備に大忙しでした。

もち米が蒸しあがると、もち米を臼の中に入れて、杵である程度こねてから餅つきを開始。腕に自信のある餅つきの経験者が､｢初めて餅つきをする」入寮者に餅つきのコツや餅のひっくり返し方などを教えていました。つき上がったお餅は、さっそく餅取り粉がまぶされ、お供え用の鏡餅に仕上げられました。

次々と餅ができ上がると、関東風お雑煮やあんこ、きな粉、大根おろし、納豆と味付けされ、昼食として潮騒の入寮者に配られました。仲間たちは雑煮や様々な味の餅に舌鼓を打ち、一足早いお正月気分を味わっていました。その後も餅つきは続き、潮騒のお正月用や支援者用ののし餅などが作られました。この日使用したもち米は180㌔で、全部が餅になりました。

この日、手伝いで参加した鹿嶋市内に住む社協ボランティアの70代の女性は「元気で手伝えることは生きている証拠。それができる自分に感謝している」と話し、潮騒も建物の一部が損壊するなどの被害を受けた東日本大震災について触れ、「３・11で亡くなった友人がいると思うと、その人の分も頑張ってボランティアをしたい。３・11以降何度か（出身地の）宮城県入りしたけど、会えない友人がいる」と語り、大震災からもうすぐ２年を迎えるにあたり、厳しい現実が垣間見えました。

たこ焼きコーナーでは、たこ焼き屋さんから教わった通りに生地を作り、たこ焼き用鉄板に生地を流し込み、タコや紅ショウガなどの具材を入れ、焼けてきたら千枚通しで丸型に形を整えるなど、懸命にたこ焼き作りに挑戦。途中からはたこ焼き作りの経験がある入寮者が手伝うなどして、行列を作ってたこ焼きを待つ仲間たちに、「潮騒たこ焼き」を提供しました。

昼頃には鹿嶋市更生保護女性会の方々が潮騒を訪れて、正月用のアレンジフラワーを贈呈してくれました。同会メンバーの１人は「昨年から会の中で、潮騒に協力することは何かないだろうか」ということで意見がありました。その結果、『少しでもいいお正月が迎えられるように』ということで、今回初めての寄贈となりました」と話してくれました。　（崎）

潮騒インフォメーションコーナー

前号でもご紹介しましたが、潮騒ＪＴＣでは今年も「ファイザープロジェクト」として農業を中心とした職業訓練・就労支援に取り組みます。昨年１年目の経験と実績を踏まえ、更に畑や田んぼの耕作面積を増やし、換金作物づくりに挑みます。また、地元の事業者の皆さまの理解を得るべく、企業訪問などを計画しています。依存症者でも、回復の道を歩めれば社会に役立てる有用な人材となります。どうか潮騒が今年も取り組む「ファイザープロジェクト」にご注目ください。

保育園で入寮者が園児たちと餅つき

＝たこ焼き、ポップコーンもプレゼント＝

暮れも押し詰まった 12 月 28 日、潮騒の入寮者たちが鹿嶋市平井の「プー横丁保育園」（山下佳子園長、園児約 20 人）を訪問し、子どもたちと一緒に餅つきをしました。人気のたこ焼きとポップコーンの屋台も設置し、園児たちにたこ焼きやキャラメル味のポップコーンをプレゼントして喜ばれました。餅つきが始まるまでの間、園児たちは入寮者から配られたたこ焼きを食べながら「うまい、うますぎる」「もう食べちゃった」などと大はしゃぎ。キャラメル味のポップコーンも好評で、ポップコーン製造機の前でポップコーンが出来るまでの様子を興味深くじっと見つめる園児もいました。

餅つきが始まると、園児たちは代わる代わる潮騒ＪＴＣ入寮者らと一緒に杵と臼で餅をついたほか、保護者の皆さんも参加して出来上がったヨモギ餅を取り分けていました。きな粉で味付けしたヨモギ餅が出来上がると、園児たちが集まり、おいしそうに食べるなど園内に歓声が響きました。

山下園長によると、同園では保育園から小学生までの幅広い年齢の子どもたちを受け入れており、中には養護学校に通う障害児やブラジル人など外国人の子どもも受け入れているといいます。保護者の１人は「いっぱいケンカしていっぱい遊べる。のびのびしているところがいい」と同園の運営方針を評価していました。この日は園内で「年末の運動会」も同時に開催され、くす玉割りなどをして楽しみました。スタッフのヒトシさんは「子どもたちの明るい笑顔が見られたので、たこ焼き作りを一生懸命に練習した甲斐がありました」と話していました。

＝あなた方が主役です。１月誕生日の仲間たち＝

左からタケシ、ノボル、トミー、ポチ、マーシャの皆さん（※潮騒ＪＴＣやダルク、マックでは、回復を目指す仲間の平等性やプライバーシー保護の立場から、入寮者は原則としてアノニマスネーム＝一種の匿名のようなもの＝を名乗ります）

1998 年 10 月 9 日第三種郵便物認可　（毎月 3 回 8 の日発行）　2013 年 1 月 21 日発行　ＳＳＫＵ　　増刊通巻第 4395 号

近藤恒夫氏インタビュー「薬物依存と回復の権利」VOL9

初期のダルクは何を飲ましていたかといえば、犬のビタミン剤だった。それでも効いていたんだ。

●やはり人格障害の人はダルクには合わない

―依存症の世界が多様化する中で、ダルクの手に余る人たちの登場をどう考えますか？

近藤　いわゆるボーダーの人たちの存在だな。正直とても扱いにくい。ヤク中のボーダーは本当に難しいのが、ぼくの実感。多くが行動障害、ズバリ言うと人格障害だな。彼らはダルクという器には合わない。だって暴力は振るうし、虚言癖の傾向もあるからね。そういうのが一人でもダルクに入ってくると、もう施設の中はしっちゃかめっちゃかになる。

―もう一つ、入寮者がダルク内を滞留していく流れがありますが…。

近藤　いわゆるダルクツアーだね。ダルク 50 カ所を渡れば、あちこちのダルクに 1 年いても 50 年過ごせる。半世紀はダルクで生きられる、ってわけだ。計算上はそうなるわな。それもいい。人によってダルクとの相性があるよね。だから一概にあちこちのダルクを渡り歩くのを全否定はできない。

じゃあ、今の時代と 20 数年前とで何が違うかというと、依存症が病気であることが認知され、精神医療がそこに入ってきた。今では依存症の人たちは精神医療の世界にどっぷりと浸かっている。これは本来的に精神医療の問題だから精神科が扱うべきだ、というのは確かに時代の流れではある。

―でも、今はダルクで処方薬依存が深刻です。

近藤　精神科が依存症の問題を扱うのはいいとして、治療の対象がもともと薬好きな人たちだから、どうしても処方薬を切り離せなくなる。初期のダルクは「薬が必要なら、ずっうと病院に入ってろ」というスタンスだった。最初は「薬飲みながらの回復はちょっと難しいよ」ということで、ほとんど処方薬の問題はなかったけれど、今はそういう人がほとんどだもんな。生活保護をもらうレベルの人たちは、ほとんどが精神科病院で処方薬をもらっている。

●処方薬依存の増加がダルクの矛盾拡大に

近藤　つまり医療の分野がせり出してきたことで、当事者と病院と福祉の共食いみたいな形になっている。事態がどんどん良くなるのではなく、どんどん悪くなっていくんだもの。前は依存症者と言えば犯罪傾向が強かったけど、今は依存症が病気であるというところでは、精神医療が依存症に乗り出したことでどうなっているか？　指摘されたように医療が処方薬の乱用者、依存症者を生んでいる。

―ダルクはどう対応したらいいんでしょうか。

近藤　医療は優しいから、腹痛いといえばすぐ薬。熱があれば「ハイ、薬」という形で、なんでもかんでも投薬治療になる。でも、この仕組みは依存症の問題をかえって複雑にしてしまっている。問題の所在がシンプルではなく、悪化して出てきているんだ。ダルクは原則として薬物の使用をやめる訓練をする場所だから、薬は必要ない。でも、実際にはいろんな病気になる。だから病院通いは避けられない。「あっちが痛い、こっちが痛い」となると、「じゃあしょうがない、ほら病院に連れていけ」とね。

その前のマックの時もそうだったが、内科や外科はいいとして、問題は精神科に掛かろうとするやつ。初期のダルクは何を飲ましていたかといえば、犬のビタミン剤を飲ましていた。「はい、これ飲んで！」ってね。それで効くんだから。とりあえず飲めばいいんだから。「ほら、治ったじゃん」。そのくらいだったよ。こんな対応でも初期のダルクは自己完結していた。だから当時は睡眠薬も安定剤もない。それがダルクの原点。それに収まらないやつは土台無理。彼らを受け入れることはダルクの矛盾を拡大させることにつながる。残念だけど、現状はそうなってきているだろう。

（次号に続く）

全国受刑者の皆さんからの手紙～潮騒通信「どっこい生きてます！」を読んで

■私には覚せい剤より盗癖の克服の方が問題

私は服役２度目で、前刑を出所して今回逮捕されるまで半年間しかシャバにいませんでした。私の持っている非常に悪い習慣は薬物ではなく盗癖です。私には窃盗問題が大きく起因しています。私の覚せい剤との出合いは19歳でした。友人の勧めと好奇心からで、周囲の友人も薬物で逮捕されたりしていました。私も幻覚や幻聴、妄想など脅迫観念等にさんざん悩まされ続けて、ほとほとシャブに嫌気が差していたので、23歳から20年以上も完全にシャブをやめていました。いったん依存症に陥ると、やめられないのが普通でしょうが、私には盗癖という別の問題の方が深刻なのです。

私はもともと蕎麦の機械打ち職人でしたが、不景気の煽りで正社員から契約社員、アルバイト扱いになり、収入も大きく落ち込みました。就業時間も１日３～５時間程度でストレスと将来の不安が募り、30歳を過ぎた頃から万引きで気分を紛らわすようになりました。そうなると盗癖は確実にエスカレートしていき、午前中ぶらりと街に出掛けて夜帰宅すると衣服の上下はもちろん、靴下まで全て新しいものに変わっていて、ポケットの中にはライターや盗品の小物などで膨れるほどでした。

もちろん盗んでいる時には自覚があってやっており、正に確信犯です。でも、自覚があるから、それがスリルになり、余計に興奮して万引きを繰り返します。当然捕まりますが、私は成人なので親や学校への連絡はなく、友人等が警察に迎えに来て帰る、という微罪で済んでいました。でも検挙が10回を超えたある日、とうとう万引きで正式に逮捕され、在宅起訴されました。そうなると刑務所行きは確実です。私は恐ろしくて堪らなくなり、シャブを入手して刑務所行きの不安と恐ろしさを紛らわせました。あろうことかシャブを効かせながら裁判に出廷し、1年2カ月の判決を受けて服役しました。

初めて経験する刑務所の中はシャブの話題ばかりでしたが、私はいろんな受刑者の影響を受けながら昨年３月に１カ月の仮釈放をもらい出所しました。すぐに職探しをして10カ所以上も面接を受けました。でも、年齢や不景気を理由に就職できず、ストレスだけが溜まりました。半分やけになって「もう、どうにでもなれ！」という気持ちでした。そして昨年９月に万引きで逮捕され、ガサ入れで私の家で覚せい剤が発覚したという訳です。

少年の頃と違い、シャブを食っていても、どうすれば眠り、食べることができるか熟知できており、顔色にも出ていなかったのです。警察もまさか私の家から覚せい剤が出てくるとは思っていなかったらしく、もう窃盗の罪なんかそっちのけでの裁判となってしまい、私の一番の悩みでもある窃盗をどう克服するかの判断がなされないまま、2年2カ月の実刑が確定しました。思い起こせば私はシャバにいた半年間に、自分の窃盗の問題をなんとかしたくて、インターネットであちこち検索して必死になって治療方法につての情報を集めました。

しかし、私の望む医療での治療よりもダルクのようにグループセラピー中心の施設ばかりで、挙げ句に占い師のような怪しげな団体まで出てくる始末です。どうすることもできません。薬物やアルコール、ショッピング、ギャンブル依存症の医療相談窓口はあるのに、なぜ盗癖に関しては皆無なのでしょうか？　私にとっては覚せい剤依存よりも盗癖の克服の方が100倍も重大な問題です。昨年出所した時に、職探しよりも盗癖治療を優先させるべきだったと後悔しています…。　**（東京都　Ｋ・Ｎ）**

■覚せい剤を使うようになって20年が経つ…

…外は既に雪で埋もれています。平成24年もあと数日だなとぼんやり考えていたら、ふと覚せい剤を使うようになって20年が経つことに気が付きました。もっとも、その半分は刑務所で過ごしています。この長い間に一体どれくらいの覚せい剤を自分で使ったり、人に売ったりしたのかと思うと正直ゾッとします。つくづく身も心も厄介なモノに取りつかれたものです。自虐的ですが、蝉みたいな人生を送ってしまいました。つまらないプライドなど、捨てなければならないものがまだ数多くありますが、気負わずに教えられた通り、今日一日を乗り切っていく気持ちでやっていきます。　**（北海道　Ｉ・Ｋ）**

■迷いなくジョブで仲間との断薬生活を望む

新年おめでとうございます。潮騒も入寮者が多くなり、施設長もますます忙しくなりますね。潮騒ジョブでの断薬運営をもっともっと拡大して日本中の依存症者を受け入れる施設になるよう願っています。私も何年かかるか分かりませんが、何の迷いもなくジョブで仲間との断薬生活を望んでいます。　**（愛知県　Ｙ・Ｋ）**

■受刑生活も残り僅か、本番はこれからだ

…毎月の潮騒通信本当にありがとうございました。調子が悪い時、投げやりになりそうな時、潮騒入寮者のひたむきな取り組みに何度助けられたか分かりません。栗原さんから指摘のあった私の“自分勝手なところ”は、周りの人でそういう欠点を口にしてくれる人がいなかっただけに、この一言で変われそうな気がします。薬物を使い出してから私は、本当に自分の都合のいいことしか考えられなくなっていた自分に気づかされました。クスリを使用する以前の自分の考え方に戻すことはできるのか？　それは不明ですが、できると信じて日々取り組んでいます。依存からの回復がここまで難しいとは思ってもいませんでした。なにもかも本当に甘く考えていました。気づいた時には手遅れでしたが、そのことに対して今は後悔していません。受刑生活は残り僅かになりましたが、本番はこれからです。　　**（東京都　Ｓ・Ｔ）**

■私はやはり依存症という病気なんだと自覚

私は今回、だいぶ長い間クスリとは縁を切った生活をしてきましたが、心の中ではやはりクスリを忘れられない気持ちがあったのだと思います。生活保護で暮らしていた身ですので、クスリを購入する余裕などはありませんでしたが、ただでくれるという言葉に誘われて使用してしまいました。全ては自分の意志が弱かったのかもしれませんが、私はやはり依存症という病気なんだと今、自分でも思います。病気なのだから治療しなければならないし、不治の病ではないと思うので、栗原さんの元で私と同じ苦しみを持つ人達と共に病を克服していきたいと思います。　　**（北海道　Ｙ・Ｋ）**

■“ダルクツアー”の果てに病気の深さ思い知る

私のダルク遍歴を少し書きます。平成 11 年に初めて東京ダルクにつながり、この時は高知ダルクでプログラムを１年間やって社会復帰し、結婚もしました。その後、地元に戻りＮＡグループを立ち上げ、仕事も頑張ってきましたが、居酒屋でビールを飲んだのがきっかけで再飲酒。それでも３年近く頑張りましたが、ＤＶで妻と離婚、会社はクビに。その後は茨城ダルクから千葉ダルクに行き、ユタカさんと会ったんでしたね。覚えていますか？

でも、スリップ（覚せい剤）して鹿島ダルクに移動、確かユタカさんはアルバイトに出ていましたね。でも 2、3 カ月居て嫌になり、地元に帰ると強引に鹿島ダルクを出ました。地元に戻ってデリヘルとかやって「底つき」しました。年明けすぐにびわこダルクに行き、ここではスタッフ研修からスタッフになり、鳥取ダルク立ち上げスタッフとして赴任しましたが、傲慢でまたもや滑ってしまいました。その後、東京の新聞販売店で働きましたが、そこでも半年でつぶれました。ベンザブロック、アルコール、ブロン、ベンザリン、ロヒピノール等に依存しました。　　その後、沖縄ダルクに約４カ月いましたが、沖縄を出て大阪の西成でシャブの売人をやっていました。しかし、妄想がひどくなったので西成から逃げ、再び茨城ダルクに助けられました。でも、クスリの欲求に負けて飛び出し、吉原のソープのボーイとして働きながらクスリを使っていました。またもや地元に戻ったものの傷害事件で、懲役１年・執行猶予４年の判決をもらい、シャバに出て地元で働いていたのですが、もはやクスリとアルコールがとまらなくなり、秋田ダルクに２年ほど世話になりました。でも結局は秋田を出てしまい、今回覚せい剤で捕まったわけです。合わせて３年６カ月でした。今回の懲役でいろいろ考えました。自分の病気は本当に深いです。　　**（北海道　Ｙ・Ｙ）**

【しおさい俳壇＝外部投句】

日向ぼこ話し上手な老囚かな　　**北海道・章三郎**

「日向（ひなた）ぼこ」は冬の寒い中にも風も無く、日和の良い日溜りなどで休憩や談をすることですが、居眠りするほどの時や何かの話に花が咲く時もある。この句の様に老人であれば、人生の悲喜交々を知り尽くして話し上手かも知れないが、老囚と云うことを思えば日向の温かさの中にも哀れを思う俳諧の一句です。

（選者・桐本石見先生）

～１２月句会作品から～

しおさい俳壇

～選者＝桐本 石見先生～

歳の瀬の賑わい出て鹿島街　（ラッキー）

原句を少し変えましたが、これで普段は静かなこの鹿島の街も歳の瀬に賑わう景と、年越の買い物などに出た作者の思いの句になります。俳句は十七文字の中に景が見え、自分がそこに居ることも大事です。

百円に賭ける有馬や十二月　（コジ）

俳句の季語には競馬は無いので、取り合えず有馬記念の開催される十二月に季語を定めました。賭け事は少ない金で大穴が当ると嬉しいですが、年の末に百円で運を占うのも面白いかも。有馬記念は一九五六年制定された中山競馬場で行われる中央競馬会（ＪＲＡ）の重賞（Ｇ１）競走のこと。

鮟鱇に初お目見えし大洗　（タカ）

鮟鱇（あんこう）は深海魚で、北海道からフィリピンに生息する。グロテスクな形だが、冬のちり鍋などは美味い。大洗の名物でもある。原句の下五の師走を大洗にして、景も見え、初見の驚きも実感の句になります。

歳の瀬やデイケアーも夢のあと　（チーナ）

施設や病院などでは各種のケアーがありますが、それが少しでも快方に向かうと嬉しい。歳の瀬には一年の過ぎた事が思い出されるが、苦しいケアーを経て今は夢の様に心も晴れる、実感の句です。

来年は是非良い年に我がする　（イチ）

一年の計は元旦にありとも云いますが、歳の瀬に過ぎた一年や人生を顧みて、来る年に思いを寄せるのも良い。しかし皆と云うよりも、先ず自分から決心して良い来年を目指すべきではなかろうか。

ウオーキング皆で参加落葉道　（カズ）

健康のためと気分晴らしに散歩したり、ランニングするのは今は何処でも盛んですが、一人より大勢でやるほうが楽しい。原句には季語が無いので、落葉道として景の見える句にしました。

山風に飛び飛び高し鵙の声　（フミ）

俳句では鵙（もず）は秋の季語なので、原句を少し変えました。鵙は小鳥ながら肉食貪欲で泣き声もキーィッキーィッと鋭い。秋ごろ人家近くにも来て鳴き、鵙日和などとも云い、この句も晴天の山里を彷彿します。

大晦日今年はやっとシャバに出づ　（？）

娑婆は仏教用語ですが、今では一般の社会の意味でもあり、隔離の世界から出る時に云う。大晦日を一般社会の生活で迎えるのは格別な思いがあり、切々としまた哀れも思う句です。

待ちわびる我の青春来る年の　（アーさん）

青春と云えば夢あり恋ありで、若さに任せて仕事も勉学も出来るが、その時代年代により戦争、就職難など思いも様々である。句の作者にも素晴らしい青春の訪れを祈りたい。これも俳諧のしみじみとした句です。

毎日が檻か師走のデイケアー　（ヨシハル）

何事の訓練や鍛錬も簡単になしえることはない。遊びのゴルフや俳句でも、それなりの域に成るには努力を要する。ケアーもまた始めの間は心身とも絶え難い、檻と云う表現も切々とした実感の句です。

震う手に寒さ堪ふる歳の暮　（コバ）

もう老齢か何かの病か手が震える。それに、歳の暮を迎えて寒さも厳しくなり、余計に堪える。俳諧の哀れを籠めた句で、選者もまた七十才の敬老の日の案内を貰い実感の思いです。

歳の瀬の一年の計仏壇に　（オノ）

一年の計は元旦が一般的だが、年の瀬に計を立てるのも、仏壇の仏に誓うのも面白い。その仏は父母かも。会社や家庭でも神社に詣でて新年の祈願をするが、大晦日に一年を顧みて元旦に決意を神に誓う。その決意や誓いが年中変わらぬ様、意志堅固で在りたい。面白い句です。

除夜の鐘年越そばのああ旨し　（コウタロウ）

晦日蕎麦とも云うそばは江戸時代以後全国に広まったと伝えられ、細くも長くの縁起に因ると云う。その蕎麦を美味しいと思えるのは、この一年がまあ良かったと思えるからでもあろうか。除夜の鐘を聞きながら静かな思いの句です。

年の瀬に我の選びし鉾田人　（ジュン）

年の瀬の慌しい中に国政選挙があった。人夫々に思いの人へ投票するけれども、鉾田人は地元の候補かも。選挙も四季を問はず、国政の行き詰まり。年の瀬にあるは如何にも困難な政局を思う、面白い句です。

しおさい俳壇・秀逸句コーナー

歳の瀬に何もぜずなり独り者　（ヒコ）

年末大掃除など何処の家庭や会社などでも行うが、独り者で何もしないのは少しの哀れも籠めて俳諧の句と云える。「来る年を綺麗に」の別の句もあるので安心ですが、部屋も心も一新して年を迎えたいもの。

年の瀬の大胆不敵昼寝かな　（サエキ）

年の瀬と云えば家庭でも会社官公庁など、また店も賑わい忙しい。師走と云われる所以でもある。そんな中に昼寝をするのは大胆でもあり、世間から取り残された様で淋しい思いもする。俳諧の面白い句です。因みに「昼寝」は夏の季語で、昔の農家の暑い盛りの労働の休憩を意としたもの。

年の瀬や見上ぐる空に星一つ　（トミー）

星は四季を通じて趣きがあるが、年の瀬の慌しい中に見る星はまたしみじみとする。それに星一つは、まだ暮がての一番ほしかも。子供の頃は月に兎が棲むことも信じたが、老いた今もそう思いたい空の星でもある。濁世の中に自然の美しさを見る思いの深い句です。

年の瀬の彩りゆたか浅草寺　（ユタカ）

浅草寺は推古天皇の御世に創建され、聖観音菩薩を本尊とし山号を金龍山と云う。また雷門の大吊り提燈は松下幸之助の寄進で名高い。門前の店や界隈は娯楽街として戦後復興し、歳の瀬の市や羽子板市で彩りも豊に賑う。私も何度か尋ねて懐かしい句です。

冬木根のあらわに哀し散歩道　（ミミ）

鹿島神宮など散歩すると、大木の根が蛇の様にうねうねと地を這うのを見かけます、ことに冬は風に晒されて哀れにも思えるし、力強さも思う。普段は散歩道にあり邪魔にも感じるが、哀れに思う俳諧と詩心の句です。

おめでとう！！
今月の特選句です

歳の瀬に明日思ふる我が身かな　（サカ）

子供の頃は正月のご馳走やお年玉を思う歳の瀬だが、歳を重ねると人生の諸々の事を思う、人それぞれに異なる過去と未来がある。歳の瀬に来る年の明日を思う我が身、しみじみとした佳句です。

初孫に会うを楽しみ年の暮　（カート）

歳を重ねて何が楽しみかと云えば孫のことかも知れない。歌謡にも宝の様に唄うけども、我が子より愛しい思いである。まして遠く離れて暮らすと余計に会うが楽しみになる、古来から変わらぬ思いながら実感の句です。

秀逸句コーナー

年の瀬の母の一期の卒寿かな　（オトウ）

一期は人の一生、卒寿は九十才のことで、歳の瀬の慌しい中に九十才を一期として母が亡くなった。人の生死を思えば四季を問はず所を問はずにある。ならば人と生まれたなら平凡でも自由に懸命に在りたいと思う。年の瀬にしみじみとした句です。

この娑婆に来たる正月三回目　（カツミ）

娑婆は梵語の忍土、忍界で、本来は耐える苦しい所のことだが、江戸時代の遊郭を天国、そこの遊女から見ればそこは地獄にも感じたので、濁世ながらも自由な市井を娑婆と思い意味が逆転した。その娑婆に三回目の正月を迎える、諸々の思い人生を思う俳諧の句です。

Information

行事予定（1 月中旬～２月初旬）

1 月 13 日　秋元病院メッセージ（19 日も）
21 日　新宿「とまりぎ」アルコール問題相談業務
23 日　潮騒俳句会（しおさい俳壇）1 月例会
27 日　潮騒家族会
28 日　潮騒 1 月誕生会
2 月 3 日　節分

献金を頂いた方（1 月 15 日現在）

▼山下　佳子様（プー横丁保育園）
▼梅島クリニック　和田院長様
▼富井　健夫様（千葉菜の花家族会）
▼石井照明様　▼内堀　高良様
▼安藤　泰子様　▼坂西　ミヤ様
▼小岩井商事株式会社様
▼白井　美代子様

献品を頂いた方（1 月 15 日現在）

▼戴　暁燕様　▼小橋　ひとみ様
▼杉本　勇蔵様　▼岩田　ケイ子様
▼楊原　幸代様　▼あわや弁当店様
▼かえで薬局様　▼堀内　誠様
▼石井照明様　▼青野　光男様
▼芝　智保子様　▼小林　久祐様

☆そのほか匿名の皆様からも献品・献金をいただきました。ありがとうございました。

※発送作業簡略化のため、振込取扱票は全員の方に同封させて頂いております。どうぞご理解の程をお願いします。

【施設側からのお願い】潮騒ＪＴＣでは使わなくなった中古パソコン、中古の車いす等の献品を求めています。施設での回復活動や日々の生活、就労支援活動などに必要なので、ご協力をお願いします。

編集・発行
特定非営利活動法人
潮騒ジョブトレーニングセンター（本部）
〒314-8799　鹿嶋郵便局　私書箱 34 号
〒314-0006　茨城県鹿嶋市宮津台 210-10
TEL/0299-77-9099　FAX/0299-77-9091
潮騒リカバリーホーム（中施設）
〒314-8799　鹿嶋郵便局　私書箱 56 号
〒311-2213　茨城県鹿嶋市中 2773-16
TEL/0299-69-9099　FAX/0299-69-9098
潮騒スリークオーターハウス鉾田
〒311-2113　茨城県鉾田市上幡木 1113-39

E-MAIL　k.s-darc@orange.plala.or.jp
ホームページ　http://shiosaidarc.com/

編集後記

暮れに追突事故に遭ってしまった。交差点で赤信号で止まっていたら、後続の車がいきなりドカーン！　幸い、我がポンコツの愛車は後部が少しへこんだ程度で済み、修理して元通りに。しかし、首を痛めた。診断結果は頸椎捻挫だったが、念の為、完治するまで整形外科でリハビリを続けている。もう治ったし、リハビリを終えていいだろうと思った矢先、年が明けた頃から痛みが出てきた。その昔、故あって学生時代に首を痛めたことがあり、その“古傷”が追突事故によって復活したのかもしれない。仰向けに寝ることができず、後ろに曲げることもままならない。そうなると気持ちが萎えて、思考が非観的になる。でも、そんな時こそダルクの教えが役立つ。年なんだし無理はせず、自然体で生きればいい。ここは今日一日だけの精神を見習おう。ほどほどの人生でいいじゃないか。人生トラブルはつきもの。明けない夜はない。とにかくポジティブシンキングが一番だ。ありがとう、我が内なるダルク、そして潮騒ＪＴＣ。（市）

発行所　郵便番号一五七―〇〇七三
東京都世田谷区砧六―二六―二一
特定非営利活動法人　障害者団体定期刊行物協会
定価一〇〇円（会費に含む）

今月も多くの方から献金・献品をいただきました。心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。おかげさまで潮騒 JTC は、回復のためのプログラムを実践することができておりますことをご報告いたします。今後ともご支援くださいますよう、なにとぞ宜しくお願い申し上げます。